

平成22年度北海道大学情報基盤センター共同研究成果報告書

1. 研究領域番号 A 6 教育情報メディア

2. 研究課題名 情報倫理教材の開発評価と学習者の意識・行動を踏まえた教育・研修プログラム

3. 研究期間 平成22年9月29日 ～ 平成23年3月31日

4. 研究代表者

氏 名	所属機関・部局名	職 名	備 考
中村 純	広島大学・情報メディア教育研究センター	教授	

5. 研究分担者

氏 名	所属機関・部局名	職 名	備 考
岡部 成玄	北海道大学・情報基盤センター	教授	
山之上 卓	鹿児島大学・学術情報基盤センター	教授	
辰己 丈夫	東京農工大学・総合情報メディアセンター	准教授	
上原 哲太郎	京都大学・学術情報メディアセンター	准教授	
深田 昭三	愛媛大学・教育学部	教授	
多川 孝央	九州大学・情報基盤研究開発センター	助教	
村田 育也	北海道教育大学・教育学部旭川校	准教授	
山田 恒夫	放送大学・ICT 活用・遠隔教育センター国際連携部門	教授	
中西 通雄	大阪工業大学・情報科学部	教授	
布施 泉	北海道大学・情報基盤センター	教授	

6. 共同研究の成果

本共同研究では、代表者・分担者らがこれまで開発してきた情報倫理教材の評価を行い、授業素材として提供してきた当該ビデオ教材・マンガ教材を、e ラーニング素材として活用することを視野におく。また、学習者の情報倫理にかかわる意識と行動との関係を明らかにすることで、大学生に対する効果的な教育プログラムと SD,FD のための研修プログラムを構築することを検討している。

本共同研究での支援を受け、11月13日、14日に全国に散らばる代表・分担研究者総計11名が一同に会しての会議を行うことができた。また、11月23日に韓国・高麗大学で行われた日韓情報倫理教育セミナーの折にも議論を進めた。全国各所にいる多人数の研究者による共同研究であるため、一同に会しての会議はなかなか難しいが、本共同研究にて、そのような機会を得ることができ、有意義な議論を深めることができた。ここに以下の成果報告とともに感謝の意を表す。

1. 開発した情報倫理ビデオ教材の評価と課題

情報倫理デジタルビデオ小品集は、全国の大学・及び大学生協仕様のパソコンにプレイインストールされるなど、広く利用されている。このようなビデオ教材の評価の視点としての成果として、当該ビデオとマンガ教材を組み合わせた教育が大学生に有効であること示した以下の論文を挙げる。

布施泉、岡部成玄、”ビデオとマンガを用いた情報倫理教育—学習効果と教材の使用順序”，教育システム情報学会誌，Vol. 27, pp327-pp336 (2010)。

今後の課題としては以下の点が議論された。当該ビデオ小品集の特徴として、何らかのトラブルが発生する物語編とその解決編から構成されることが挙げられる。本来の物語・解決の二部構成の意図は、物語編の末で学習者にその問題は何かを考えさせ、あるいは学習者同士で議論させたのちに、解決編を提示することである。しかし実際の授業等での使用では、それらを連続して視聴させるこ

(研究成果のつづき)

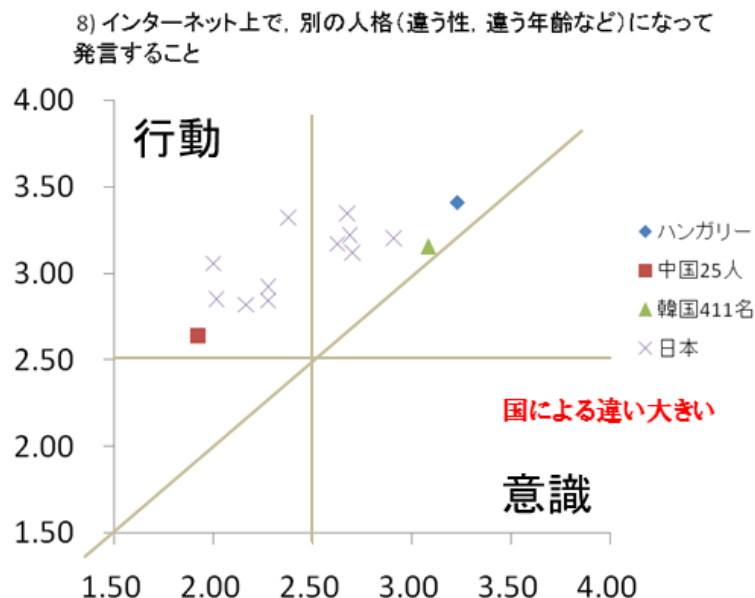
とが多い。効果という点では、やはり一度、物語編視聴後に論点をまとめることが有効と考えられる。そこで、e ラーニング素材として活用し、学習者に自立的に学習させるためには、物語編の最後に論点をまとめて提示し、それに対する解答を行わせてから、解決編を視聴する形の構成が望まれる。本視点に関しては、今後、実際の大学生に関する教育プログラム、SD/FD としての研修プログラムに組み込むことを進めていく。また授業での展開として、論点の提示を含めた物語編の提供とともに、教員（教える立場）としての資料の拡充に関する研究を進めていくことを検討している。

2. 学習者の情報倫理にかかわる意識と行動との関係と国際比較

愛媛大学の深田教授の現状分析・提案の下、研究代表者・分担者が所属する各大学における学習者における情報倫理意識の調査を行った。また、同一の設問による調査を海外の研究者等の協力を得て行い、また年齢における依存性を見るために、国内におけるインターネット調査を行い、その結果について議論を行った。本件に関しては、現時点では学会発表のみであるが、今後、査読論文として発表することを予定している。また、調査結果について、一例を下記に示す。

学会発表：深田昭三，他 10 名，” 大学生の情報倫理にかかわる意識と行動—情報メディア経験と情報倫理教育の効果”， 教育システム情報学会第 35 回全国大会講演論文集，pp185-pp186 (2010).

調査結果の一例



左図は、「インターネット上で別人格になって発言すること」に対して、問題があることだと思うか否かについて、「非常に問題がある(4)」から「問題があるとは言えない(1)」までの 4 段階で自己の意見を聞いたもの(意識)と、自らが行うことに関する抵抗の有無を「非常に抵抗がある／絶対にしない(4)」から「全く抵抗がない／する(1)」の 4 段階で聞いたもの(行動)の結果の差異を示している。日本に関して複数の印があるが、これは、本研究に携わる大学における大学生の調査と、インターネット調査で男女・年代別に行った調査結果をすべて示したものである。日本での各種調査での結果の広がり以上に国による違いが大きいことが示されている。

上記は結果の一例であるが、このような調査結果・分析を踏まえ、論文にまとめる予定である。

3. 海外の研究者との交流

本共同研究者の殆どは 11 月 23 日に日韓情報倫理教育交流セミナーに参加し、韓国における情報倫理教育における研究者との交流と今後の情報倫理教育の在り方についての検討を進めている。情報倫理教育は、問題のグローバル化とともに、国を超えた検討や情報交換を進めながら教育プログラムを開発していく必要がある。本共同研究では、そのための研究者間交流も行った。